

「ぱちんこ依存問題に関する相談お

よび回復支援」事業

ホールさんの協力をいただいて、認知度が上昇。
相談件数が大幅にアップ!

2006年より活動を始めたリハビリサポート・ネットワーク。ぱちんこ・パチスロの遊技に関する依存及び依存関連問題解決の支援を目的に設立された非営利の相談機関だ。3年目を迎えた今期は専門家対象の講座を開くなど新たなステップを歩み始めた。

ポスターを見ての相談は「本人」が7割になる。

データ報告を見ていただくとおわかりのように、2008年度の相談件数の総計は1187件だった。これは前年比のおよそ1.4倍にあたる。リハビリサポート・ネットワークの代表である精神科医の西村直之さんはその要因はホー

ルの協力の成果だという。

「全日遊連さんなどを通じて、リハビリサポート・ネットワークの告知ポスターの掲出をお願いしてきましたが、3年目となりホールさんの認知度も高まったということもあって、貼りだしていただいているホールさんが増えたようです。リハビリサポート・ネットワークのことがマスコミなどに取りあげられると一時的に増えることもありますが、この時期は大きく紹介された記事はありませんでしたので、ポスター効果がそのまま相談件数に跳ね返ったようです。全てのホールに貼れば、10倍の相談件数になると思います」(西村さん)

新聞などのマスコミの記事をみての反響はユーザーの

家族からが多いのだが、ポスターの場合、当然ながら本人からの相談が増える。今では6~7割が本人からの電話だそうだ。

「依存症だという認識はないのですが、なんとなく不安に思っ

て電話をかけてくる方が増えました。これは自分を客観化しようという気持ちがある証拠で、依存度が高まる前にサポートを開始することができるので、たいへん有効です」

この時期に接触を経験すれば、相談することへの敷居が低くなる。万が一深刻な状況になった場合でも、相談がしやすくなるのだ。したがってホールへのポスターの掲出はたいへん効果的だと言う。

他の依存症とはまったく異なる症状だ。

相談件数のうち8割近くの方にはそれぞれの地元で相談することができる場所を紹介している。アンケートをとるうちにのめりこむユーザーの特長も見えてきた。例えば、男性の場合はぱちんこを始めた年齢が10~20歳台という人が多く、女性の場合は全年齢層に及んでいる。

都市部では家庭内暴力を避けるためにホールに逃げ

担当者より



引き続きのご協力をよろしく
お願いいたします。

ぱちんこ依存問題相談機関
リハビリサポート・ネットワーク
代表
西村直之さん

私たちの事業を採算ベースに乗せることはできません。やはりこうした社会貢献的な立場で行うしかありません。しかしアルコールや薬物依存への対応をそれぞれのメーカーはやっていません。そういう意味でも、全面的にこの活動を支援していただいている業界関係者の皆様には頭を垂れるばかりです。

ているというようなケースがあり、ニートの増加の影響もある。地方では高齢者が行き場を求めてホールに向かうということもある。このように地域や年齢、家庭内事情などが複雑にからみあっており、原因をひとつにくるというわけにはいかないようだ。

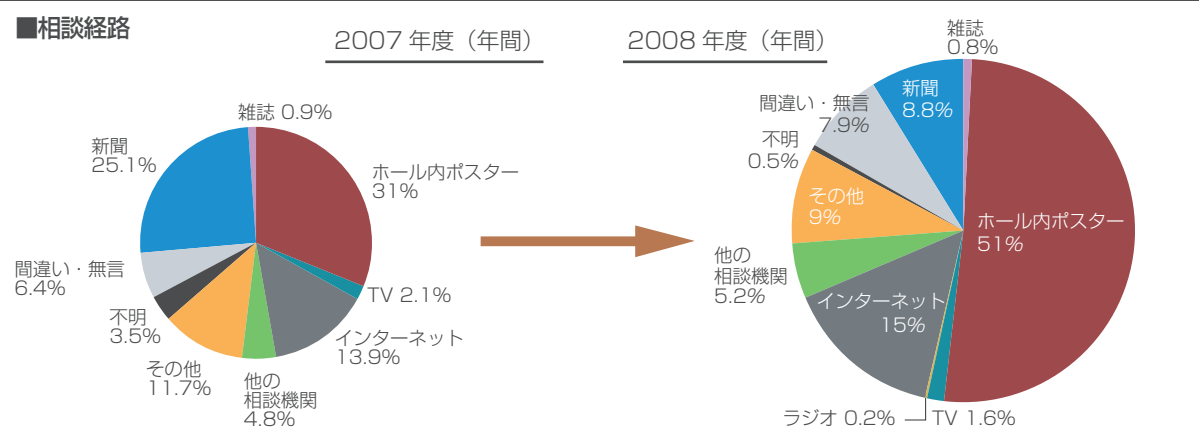
「適当な言葉がないのでぱちんこ・スロット依存症と言っていますが、アルコールや薬物などの依存症とはまったく違いますね。後者の場合、本人が相談に来るとするのは1割にもなりません。ぱちんこ・スロットの場合ユーザーが1000万人もいて、現代のいろいろな問題と絡み合っている。若い人も多く、他の依存症の治療のようにはいきません」と西村さんは語る。

これまでぱちんこ・スロット依存症専門の研究機関というものはなく、こうしたデータが集まるのも初めてのことだ。行政もなんら把握していない。

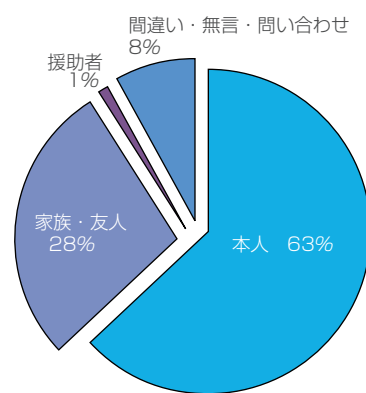
こうした中、サポーター養成講座という試みも新たに始めた。詳しくは次ページで紹介するが、ユーザーが相談に訪れそうな施設、たとえば医師やソーシャルワーカーや司法書士などを招いて、討論を行うというもので有意義な発見が多々あった。1000万人ものユーザーがいるのに、これまでまったく研究されていなかった分野によりやく光が当たるようになったことになる。今後、同ネットワークの存在は社会に欠かせないものになっていきそうだ。

2008年度相談件数

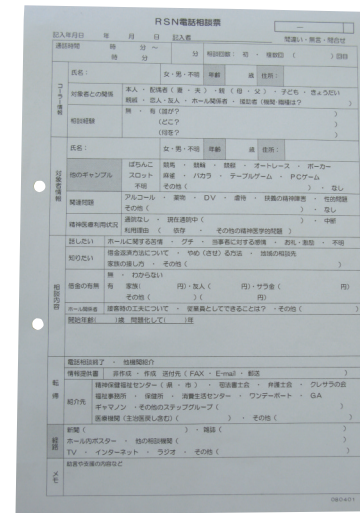
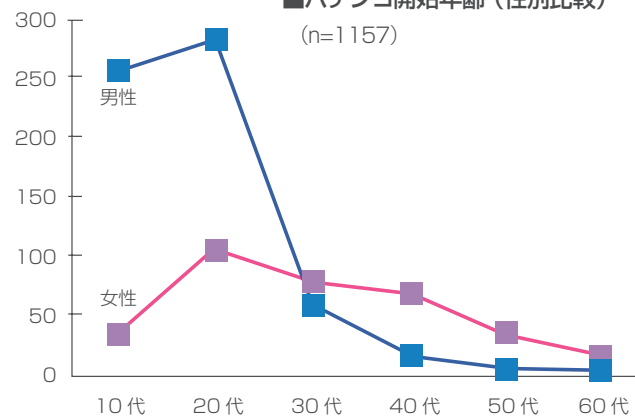
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	103	114	90	113	98	94	92	83	85	95	108	112	1187



相談者と対象者の続柄 (2008年 n=1187)



パチンコ開始年齢 (性別比較) (n=1157)



相談を受け付ける際にはこうした相談票を使って、ユーザーのデータを集めていく。

さまざまな立場の人が集い、 「ばちんこ依存問題」の全容に迫る。

リハビリサポート・ネットワークが
「サポーター養成講座」を定期的に開催。

これまでばちんこ依存に関する相談は、医療機関や司法書士、あるいは警察などに集まっていた。しかし、この問題は借金を始めとする経済的問題、就労や就学の問題、家庭環境の悪化、健康被害などが絡み合い、ひとつの機関や立場では解決できないことが多い。

そこでリハビリサポート・ネットワークはこうした関係者たちの意見交換の場や、情報提供の場として全国各地で「サポーター養成講座」を開いている。「この問題の裾野の広さを改めて認識したというのが現状ですね」というのがリハビリサポート・ネットワークの西村直之代表の感想だ。

というのも、同じ問題を議論しているのに、立場が違えばまったく別の言葉や表現になるからだ。確かに医療関係者が気にする部分と、司法書士が気にする部分が異なるのは当然だろう。また借金問題を解決しても、本人の依存が治らなければ再発するし、同様に本人が精神的に立ち直ったとしても家族に問題があれば元の黙阿弥になりかねない。つまり、一つの見方からだけでは、

問題の全体像が把握できないということだ。

「問題に対応できる機関が今までなかったのです。社会の隙間にはまった人たちともいえる。私たちはそうした隙間を埋めていくためのネットワークづくりをしているわけです」

他のジャンルの知識が入ってくれば、専門分野での対応のしかたも変わってくる。相談すべき施設の存在を知っておくだけでも援助に幅がでてくる。関係者の中にそうしたサポーターを作っていくことがこの講座の狙いになっている。

「まだ手探り状態で、形式も毎回変えています。例えば各論を立場の違う人同士で話し合うとかみ合わないこともわかってきましたので、全体像の把握は講義で行って、各論からはそれぞれの分野でのディスカッションにする方がいいかですね。何事も動きだしたいへんですが、すでに動き出しましたから効果はでてきますよ」

最近、西村さんは他の依存症の講義などに招かれて話をすることも増えてきた。講座などの活動が人脈をつくり、認知度をあげてきたのだ。

●ギャンブル問題に関わる人たち

